

エミリー・ブロンテの中に流れる アイルランドの血

宮川下枝

今回は水田先生の記念号となるそうである。

先生はアイルランド作家 Yeats を研究され立派な著書も出して居られた。それでは私もアイルランドに関係ある題材を撰びエミリー・ブロンテの中に流れるアイルランドの血について考えてみたい。

エミリーの父、Patrick Brontë はアイルランドに生まれた人である。祖父は Hugh Brunty と言い Emdale あたりに住む農夫であった。

私もアイルランドを訪れたが、Joyce のダブリンを歩いただけであって、もう少し南下してこの Patrick Brontë の故郷を訪ねてみなかったことは残念なことであった。だがあのアイルランド独特の美しい緑は私の頭の中に今もはっきりと残っている。又西海岸に出て大西洋が見えると感激して海辺を歩き廻ったのもよく覚えている。

少し歴史を覗いてみよう。

紀元前 6 世紀以降中央ヨーロッパ方面からケルト系の民族が侵入し始めて、イギリスの島の原住民イベリヤ (Iberians) を征服した。イングランドの東南部を占領したケルト族はブリトン人 (Britons) と呼ばれた。ローマ人はブリタニア (Britannia) と呼んだので、今日のブリテン (Britain) ということばが出来た。このケルト系の民族が島の南方一帯を占領して数々の砦を築いた。

紀元 43 年ローマ皇帝クローディアスの大軍がブリタニアの南部を占領した。

北欧のゲルマン民族であるジュート人・アングル人、サクソン人がイギリス島に渡来したのは五世紀ごろであるが、やがてイングランドに七つの王国が出来るとここにアングロ・サクソン人によるイングランド (Angles Land) が誕生し、やがてキリスト教に改宗することになる。

この五世紀の中ごろブリタニアに侵入して来たアングロ・サクソンをハドニクス山の戦いで撃退した。だがやがて、Scotland, Ireland, Wales に追われる。

小説の中に見られる Celtic blood

Scotland, Ireland, Wales に追われた Celts 族は、England では Britons として活躍した勇猛果敢な民族であった。又実に素朴であった。

私も Wales で出逢った人達の朴納な純粋さを忘れることが出来ない。この Britons のもつ純朴さそして勇氣というものは Celtic blood としてエミリーの中にも濃く流れているのである。

5世紀の中ごろブリタニアに侵入して来たアングロ・サクソンをハドニクス山の戦いで撃退したブリトン人の王アンブロシウスは伝説上のアーサー王 (King Arthur) と云われる。「円卓の騎士」に関する物語が書かれたのは12世紀以後のことであるが、ウインチェスターの丘を登ると城の Great Hall に “Round Table of King Arthur” が飾ってある。⁽¹⁾ Tennyson によって美しい詩で「アーサー王物語」として謳われ全世界の人々に深い印象を残している勇氣ある Celtic blood はエミリーの心の中にも深く根を下ろしその作品の人物の中に見られる。この Celtic という言葉を辞書で調べてみれば「近代では Ireland や Wales その他に定着したものを言い独自の言語を用い、(Gaelic) 又民話や神話を持っている。特に Ireland では19世紀の頃からそれらの民話の価値を喧伝しかつその中に文学的な素材を求め神秘的情緒を特色とする文学を生んでいる。」⁽²⁾とある。

水田先生はアイルランド文学会を我が梅光女学院大学で開催することに尽力され大変なお骨折であったが新しく建設された図書館にあるマツケンデー・ホールに於いて外国の方々をもお迎えして盛大にその会が開催され

たのであるからさぞかし御満足の事であつただらうと推察する。議長として立派にその務めを果されアイルランド大使御夫妻をも見事に招待されたのであるから華々しいお仕事振りであつた。

Dr. Phyllis Bentley はブロンテ姉妹の作品を described the works of the Brontës as a Yorkshire tune played on an Irish harp⁽³⁾

(アイルランドのハーブで奏でたハワースの曲がブロンテ作品である。)と述べているが、ヨークシャー的なところと Celtic なところが見事に混合した姉妹の作品である。

その父の生い立ちを調べてみるならば

エミリーの父パトリックは北アイルランドの County Down, Emdale に Hugh Brunty と Eleanor Brunty の長男として生れたとある。低い山並みの遠くに見え静かな淋しい、だが緑の大変美しい田舎まち Emdale と記されてある。そして小川の流れる畑の続く農村の小さな家でパトリックは生れた。貧しい農家に生れた少年パトリックが自学し認められて村の学校を教えられるようになり更に認められて有力者の援助を受け大学へと行く道を見出すことが出来た。⁽⁴⁾

アイルランドの背景

A large number of influences can be discerned in the works of the sisters, and I am suggesting no more than that the Irish background is one which has been a little overlooked.⁽⁵⁾

(多くの影響が姉妹の作品の中の見出されるが、アイルランドの背景が少々見漏され過ぎているという事は声を大きくして申し上げたい。)

A. 地名、人名

Brontë なる人名はパトリックの父 アイルランド人の Brunty から来たものだが、パトリックがケンブリッジ大学生となるや名を読み違えられたのか、彼自身が変えたのか Bronte となり次 Bronté となりそしてこれをしゃれた Brontë としたのはパトリックのようである。⁽⁶⁾

又「嵐ヶ丘」に出てくる人名 Grange, Isabella, Edgar 等という名はヨークシャーの名前ではなくアイルランドの名である。

B. Classic Irish legend

Anglo-Irish Folk tradition

「嵐ヶ丘」には姉妹が女中 Tabby からきいた古典的アイルランドの伝説、アングローアイリッシュの民話の影響が見られる。その共通点として Chitman は次の三つを挙げている。

(1) the pagan, animist nature of the relations between man and nature.⁽⁷⁾

(人間と自然の關係に異教徒的なアニミズム(靈魂不滅説)的などころがある。)

(2) the intense and amoral nature of 'love' its capacity to nullify death.

(深い愛、又道德觀念のない愛、そして死を無効にする力)

(3) the oral character of the story with its ancient mariner-like capacity to hypnotise the reader... in that her level of soul-felt intensity appears greater and more constant.

(コーリッジの「老水夫」の如くきき手を催眠術にかけるような声を出して物語る能力、その点に於いてはエミリーの心の奥深くに感じた人を魅きつける力は、更に大きく不変のものに思われる。)

C. Mystic power

神秘性。エミリーの作品に見られる神秘性についてはこれら Irish Fairy Tale にあるものと述べられている。⁽¹⁰⁾

例をあげるならば、「嵐が丘」の中に現われる最も神秘的な場所は Penistone Crag である。「お前のおばけがあそこに出るよ」と病床の Catherine は女中 Nelly に云う。又キャサリンの娘 Cathy は母亡きあと靈に呼びよせられてペニストーンがけに行くが、同じようにアイルランド伽話にも小妖精がいて家畜をおびきよせ害を与えと言われている。又、白髪の魔女が君臨しているとも考えられている。

だがエミリーは自分の頭で考え出した民話的なところがあり、田舎道を

ヒースクリフとキャサリンのまぼろしが歩いていたというのは人類は自然の一部であるとの彼女の考えを表明したものであると説明されている。

又最後の場面で Lockwood が教会のあたりを歩く時、蝶があたりを飛び廻っている光景が描かれている。蝶はアイルランドでは、死人の霊を表明するものだと言われている。⁽¹¹⁾

D. Mystic Understanding

更に Chitman の述べる神秘的な解釈について言及しておこう。エミリーは謎の文学者 (The⁽¹²⁾ sphinx of Literature と言われているが、彼女の自然とか神の解釈は特殊なものである。若い頃に神との直接の一体観、神との霊的交流を持ったエミリーが考えたままを述べているのであるが一般人には非常に神秘的に感じられる。エミリーの信じる神は父パトリックの信じる、キリスト教徒としてイエスを通して語りかけ給う神ではない。彼女の信じる神は「存在」として描く方が理解し易いかも知れない。

“When she came” to write her one novel, it was imbued with passion, the passion of man for woman and woman for man, but her experience with ultimate made sexual attraction unnecessary for her.”

(彼女は唯一つの小説を書くに至った時、その小説は女に対する男の情熱又男に対する女の情熱に溢れているのであるが、窮極に至りついた感情の経験では性的魅力等というものは、彼女には不必要なものだった。)

“The whole world awake and wild with joy.”⁽¹⁴⁾

(全世界は目覚め歓びに躍っているの)

キャシイがリントンに話す夏の過し方の一句だが有名なところである。広野のヒースの丘で木の枝に腰を下ろして空も太陽も地も月も星も飲みこんでしまうような歓喜をエミリーは感じていたのである。この mystic understanding も Celtic temperament と呼ぶべきものであろうか。姉シャーロットとも妹アントとも似ず、エミリーは一人だけこのような不可思議な解釈をしていたのである。

小説の構成

「嵐ヶ丘」はLockwood という Thrushcross Grange を借りた都会人と、女中 Nelly によって物語られる型をとっている。この物語り形式は何処に源をもっているかと考えると、これこそ Gaelic source ということになる。

姉妹達の父 Patrick Brontë は Brunty という名であったことは先述した。この父エミリー達の祖父にあたる Hugh Brunty は Prumty というのが一番始めの名であるが、孤児であったり、養父のもとを逃げ出して働いて成功したり小説ヒースクリフの生涯を地でいくような人であったが、アイルランドの伝統を受けて実に民話を物語ることの上手な人であった。彼が仕事を終えて農家の暖炉の前で、話を始めると近所の人々があちこちから集り、その活々としたリズムカルな話振りに夢中になって聞き入ったということである。

この父の話を耳できいて成長したパトリックは今度は自分の娘達に又アイルランドの民話をきかせた。姉妹は身をのり出して父のこの話をきいたが特にエミリーが一番興味を示してきき入ったそうである。

being an Irish story, it has to do with a castle, and a haunted one with ghosts and goblins and a "skeleton wrapped in a white sheet."

All of which goes to show well and truly her father's stories had done their work, for just as in the ingle nook of the Emdale cottage the immature intelligence of Patrick Prumty, the Irish lad, was stimulated and made robust by his father's weird stories and legends told in the glow of the Kiln fire, so in later, times in the living-room of the Haworth Parsonage, the all-too-quick imaginations of the Rev. Patrick Brontë's little family were thrilled and enthralled by his rehearsal—

(15)

(アイルランドの話だから城が出てきたり、幽霊や悪鬼に付き纏われたり白いシーツを被った骸骨が出たりする。お父さんの話が如何に上手で真実味があったかを示すのである。丁度炉の火のすみっこで、そのイメダールの家でまだ未熟のアイルランド少年だったパトリックの知性はかまどの火の燃えるのを見つめ乍ら父の話す気味悪い話や伝説によって大いに奮い立ち、又勇敢になったように、後日、ハワースの牧師館の居間で非常に敏

捷なブロンテ家の小さい子供達は父のきき覚えの話をきき乍らゾクゾクして魅了されたのである。）

Catherine

どうも母キャサリンの方は激しい性格ばかり目立ち我儘な処が浮き彫りにされて雄々しさが浮んで来ない。唯彼女に勇気があったのはヒースクリフと一緒に過した少女時代だけのことで、新しい世界を夢みつつ Thrush-cross Grange に夜道を駈け出して行く折には素晴らしい勇気と底力が見受けられる。

We ran from the top of the Heights to the park, because she was barefoot.⁽¹⁶⁾

(僕たちはハイツのてっぺんから庭園まで駈け出して行ったのさ。あの子にははだだったもので)

駈け出した途中靴も脱げ裸足のまま走り続けるところ等も雄々しい少女の姿である。行きついた新天地に垣根越しに見える部屋は美しい素晴らしい処。真紅のカーペットを敷きつめ、真紅のカバーをかけた椅子、テーブル、金色にふちどった白い天井そこから銀色の鎖でつながれているシャンデリヤ。彼等にはまさに別天地だったのである。僕に見附^{しも}かかってヒースクリフはどなられて追い帰えされるのだがキャサリンはリントン家の犬に噛みつかれてしまう。

I had Cathy by the hand, and was urging her on, when at once she fell down. 'Run, Heathcliff, run,' whispered. ... She did not yell out—no, she would have scorned to do it, if she had been spitted on the horns of a mad cow.⁽¹⁷⁾

(僕はキャサリンの手を掴んでいたんだよ。そして早くとせきたてていたんだ。そしたらキャサリンが突然ころんちゃったのさ。「ヒースクリフ、逃げて」と彼女は囁いたんだ。叫び声もうめき声もあげなかったよ。気狂い牛の角にあたってとしても泣き叫ばないだろうね。あいつはそんなことは軽蔑しているんだ。)

強いエミリーが少女時代のキャサリンの中に躍如としている。精神力の強さが現れている。

Heathcliff

ヒースクリフの勇気と云えば、何と云ってもあの激しい復讐と18年間を耐え続けて遂にキャサリンの許に行くことを信じて迎えた死の最後の瞬間であろう。その真底の勇気。

だが彼の場合少年時代主家の少年 Hindley と小馬を争いとる場合を最適な例として挙げたい。Earnshaw 氏はお祭市場に自分の息子ヒンドリーとヒースクリフに二匹の仔馬を求め二人に一匹ずつを与える。今だったら車一台ずつ買いつけてやるようなもので大した贈物だ。主人の愛を確信していた少年ヒースクリフはさっさと綺量のいい方の馬を自分のものに決めてしまう。処がそれが転んでびっこになるとヒンドリーにお前のと取り換えてくれと云う。甚だ勝手な申し出でヒンドリーが腹を立てるのも無理はない。秤の重りをヒースクリフ目がけて投げつける。⁽¹⁸⁾

Hindley threw it, hitting him on the breast, and down he fell, but staggered up immediately... I was surprised to witness how coolly the child gathered himself up, and went on with his intention, exchanging saddles and all.

(ヒンドリーはそれをヒースクリフ目がけて投げつけました。それはヒースクリフの胸にあたり彼は倒れたのですが、すぐよろよろと立ち上がりました。如何に冷静にそれを耐えたかを見て私は驚きました。)とネリーは話している。更に続けて「勇気を出して立ち上ると自分の思う所に歩いてゆき鞍などを皆取り換えました。)

まばたき一つしないで、ヒンドリーの攻撃を受け止めた勇気、天晴れなものである。

Cathy

何を言っても目立つのは娘キャッシーの雄々しさである。母キャサリン

と非常によく似た美しい女性に描かれているが、母にないやさしさをキャッシィは持っている。だが勇気の点となるとなかなかのもので、キャサリンの死後荒れ狂う舅のヒースクリフに対しても微塵の恐れも示していない。

“I defy you to frighten me.”⁽¹⁹⁾

“keep your eft’s finger, or I’ll kick you. “I detest you.”⁽²⁰⁾

(私をおどしても駄目よ。とキャッシィは敢然として挑戦する。

(お前なんか大嫌いだ。そのいもりのような指をどけろ。でなきゃ蹴り飛ばすぞ。)

この荒々しい舅に対して「私あんたなんか一寸も恐くないわ」と云ってのけるキャッシィは狂暴な犬に対して先手をとって殴りつけるエミリーそのものである。ぶんなぐられた犬が以後おとなしくエミリーの忠実な家畜になったように、ヒースクリフもキャッシィに対しては、おとなしくなる。

又少年リントンが父親ヒースクリフの命令で野に出てキャッシィが通りかかるのを待つ場面がある。体も弱り、精神力も弱ったリントンはやっとキャッシィを引き寄せることは出来たものの、歓待する程の心の余裕はない。

“But my father threatened me,” gasped the boy, clasping his attenuated fingers, “and I dread him, I dare not tell”

“Oh, well” said Catherine, with scornful compassion, “Keep your secret. I’m no coward—— save yourself. I’m not afraid.”⁽²¹⁾

(「お父さんが僕を脅すんだよ、」少年はやせ細った指を握りしめ乍ら喘いだ。「恐いんだよ。本当は云えないしさ。」「いいわ。」キャッシィは同情はしても軽蔑しきった顔で答える。「やたらと泣きごとを云うものぢやないわ。私は憶病ぢやないわ。私はヒースクリフなんか恐くないわ。」

と堂々と答える。めそめそと泣き事を云うなどは勇気あるエミリーの最も嫌う処である。

又キャッシィが冬の夜一人馬を馳せて嵐ヶ丘のリントン少年のところへ通う雄々しいそして美しい場面も描かれている。

The moon shone bright, a sprinkling of snow covered the ground.

(22)

(月は煌々と輝き雪は地上にキラキラと光っていたわ。)

I have been to Wuthering Heights, Ellen, and I've not missed going a day after you left your room.⁽²³⁾

(私はずーと嵐ヶ丘に行っていたのよ。エレン、お前が部屋を出ると出かけて一晩だってぬかした事はないのよ。)

but it was beautiful moonlight after tea, and as I rode on, the gloom cleared, I shall have another happy evening, I thought to myself.⁽²⁴⁾

(食事のあと月あかりの美しい晩だったわ。馬に乗って駈けている間に雲も晴れたの。又今夜も楽しい晩になるわ」と私は自分に思いこませていったの。)

夜一人で馬で出かけるのも勇気のある行動だが、必ずしも機嫌がよいとは限らぬ我儘なリントン少年の処に出かけるのは「楽しい晩にしよう」と自分に云いきがせて出かける更に勇気の要る仕事だった。

又この弱いリントンと無理に結婚させられて、若い夫の死迄を一人で看とらされた場合、冷え切った体で階下に下り、炉でやつのことで体をあたためる場合

“Now he is safe, and I am free.”⁽²⁵⁾

(あの人はもう安全よ、そして私は自由になったわ)とつぶやくあたり本当の辛さに耐えた勇気が感じられる。

Nelly

さて強者のネリーの勇気を考えてみよう。

この人は本当に云わなければならない時、云わないで重大な悲劇を惹きおこしてみたり、自分の云うべき事を人々に云わせたり、本当に勇気のある人かどうか考えさせられる処が処々あるが、とにかく魂膽はある人間のようなようである。印象的な場面は？ と云えば妻を亡くして自放自棄になっているヒンドリーに対応する豪膽さであろうか。

妻を亡くして悲歎にくれるヒンドリーはその悲しみの表現の仕方荒々しい。きくに耐えないような恐しいののしりの言葉を吐き乍ら入って来る。ネリーはこれは大変とばかり彼の赤坊を手のとどかぬ台所の戸棚の中に隠くそうとするが見附かってしまう。“ほら見付けたぞ”と、ネリーの処に近かよると、子供を何時も何処かえ隠くしてしまうと腹を立てて、ナイフをネリーの口に付突き付ける。彼は目茶苦茶に子供を可愛がってみたり、いじめてみたりして危くて側から見ていられないことには気が付いていない。悲しみの余り心の平衡を失った彼は何を始めるか分らない。

He held the knife in his hand, and pushed its point between my teeth, but for my part, I was never much afraid of his vagaries.

I spat out, and affirmed it tasted detestably. I would not take it on any account.⁽²⁶⁾

(ヒンドリーは包丁を握り、切つ先を私の歯の間に突っこむのです。ですが私としては、ヒンドリーのこのような気紛れは大して気になりません。私はベッと唾を吐き「まずい味ですこと。とても頂けませんよ」と云いました。)

普通の女だったら大悲鳴をあげ、相手を慌てさせて大怪我をするという事になるのであろうが平然とベッと唾を吐く仕ぐさ、云いぐさは実に恐さを知らぬエミリーがネリーの中に活々と映し出されている。

エミリー自身の中に見られる Celtic temperament.

今度はその Celtic blood の流れを

彼女自身の行動の中に探してみたい。

「嵐ヶ丘」の中では冒頭訪問者 Lockwood が誰も居ない部屋に残されて、部屋の隅にたむろしている犬どもを怒らせ襲いかかられ孤軍奮闘する非常に humorous な scene があるのであるが エミリー自身が犬に対してとった行為も第三者側から見れば実に愉快なエピソードとなっている。

ある日、エミリーの飼っている非常に大きな犬 Keeper が近所の犬と喧嘩を始めたそうである。大きな犬同志の喧嘩は凄絶なものであった。大の

男達が手の下しようもなく、唯呆然と眺めていたということであるから、滑稽この上ない光景であるが、この時エミリーは家にいて静かに本を読んでいた。外でこの騒ぎを見た女中 Tabby が息せき切って家にとび込み主人にこのことを報告するや否や、エミリーは書物から眼を離すと黙って台所から缶を取り上げると、外にとび出して行った。物も云わずに二匹の動物に近ずくと、やにわに缶の中身を力一杯振りつけると犬どもは、むせてしまって急にしょんとしてしまった。呆然として棒立ちになっている男共を尻目にエミリーは元気のなくなったキーパーを引き連れて引き上げて行った。缶の中身は胡椒であったということである。この壮拳を一口の口もきかずにやってのけるエミリーであるから

“No coward soul is mine.”⁽²⁷⁾

(臆病な魂は私にはない。)

と云ったエミリーの魂そのものである。この詩は彼女がしっかりした信念を掴んだ後での作ということであるが彼女の魂の中には既に若い時から雄々しい勇氣と力が備っていたのだ。これも Celtic blood の流れている証拠である。

恐れを知らぬエミリーの精神はもう一つキーパーの事件のなかに現れている。キーパーが一階の洗いたての真白い掛布団の上に寝そべっていることが女中タビーによって報告された。この純白の流濯仕立ての掛布団はキーパーにとっては快いことであろうが、犬には許されないことだった。それを知ったエミリーがどのように腹を立てたか。だが部屋の隅っこで息をひそめて見守っていた姉シャーロットと女中タビーはまさか妹が犬を殴ったりはしないだろうと思っていた。

but the watchers knew she had been warned that Keeper must on no account be struck or he would fly at her throat. The two women saw the girl plant the ugly strong dog in the corner and, before he could spring, ponel his fierce red eyes with her bare fist until he could not see. She bathed his swollen face afterwards and Keeper padded after her, more her dog than ever. Emily had mastered him.⁽²⁸⁾

(犬になぐりかかれば犬が彼女の喉に喰いつくからどんな事があっても殴ってはいけなとエミリーは警告されていることを知っていた。

だが二人が見たのは、エミリーがこの醜い汚い強い犬を隅っこに釘付けにすると犬がとびかかる前に、犬の眼目がけて素手で殴りつけた。

だがエミリーはこの犬の腫れ上った顔を丁寧に洗ってやると、やさしく撫でてやった。それ以来キーパーはすっかりエミリーの家来となり主人のあとをテクテクと従って歩いた。)

もう一つエミリーの気丈さを示す犬との事件がある。

Yet there had been the occasion at home when she had given a drink to a strange dog which had snapped at her and she had gone into the kitchen, taken up one of Tabby's red-hot irons and cauterized the wound without saying a word to anyone.⁽²⁹⁾

(家に居た時迷って来た犬に水をやった事があった。処がその犬が彼女に噛みついたので、エミリーはものも云わず台所にとび込むと女中のタビーが真赤に熱していたアイロンを掴むと、その熱いアイロンをいきなり自分の傷口にあて焼灼して消毒してしまった事があった。)

というすざまじい迄の勇氣である。

又兄 Branwell に対しても大火傷をまさにせんとする処をエミリーの危機一髪の英断と勇氣によって助けた話がある。

Unable to sleep at night, Branwell was beginning to stay in bed during the day. Anne once found him in a heavy stupor with the bed alight — he had forgotten to blow out the candle he had intended to read by. When she could neither rouse nor move him she ran for Emily, who had the presence of mind to fetch a bucket of water before she flew upstairs. ... she tore down the burning bed-curtains and emptied the water over them.

“Don't tell Papa”, she warned,⁽³⁰⁾

(夜眼れぬ兄ブランウエルは昼間ベッドでうとうとするようになった。薬に侵された彼は無感覚状態になっていたが、本を読もうと思ってつけていたろうそくの火を消すのを忘れてしまっていた。妹アンがそれを見付け

た時は火はカーテンに燃え移っていた。アンはどうする力もなく、姉エミリーを呼んだ。エミリーはとんで行って見る前に、ちゃんとバケツに水を入れて走る程の心の落着きがあった。兄をベッドから引き摺り下ろすと、燃えるカーテンを引きちぎり、水をかけて火を消した。「お父さんに云っちゃ駄目よ」と妹に釘をさしておいた。

だがエミリーの実生活に於いて一番勇気ある場面は彼女の死の様である。私もハワースを訪れて今は Museum となって公開されているエミリー達の住んでいた牧師館の玄関を入り、その左側のここが彼女が最後の息を引き取ったところだという部屋の入口の前に立ち、その長椅子を見た時は涙が止まらなかった。彼女のその最後の様子を Brysson Morrison の *Haworth Harvest* の文によって再現してみよう。

「十二月に入ると切るような力で広野に吹きつける、すざまじい風は氷のように冷たかった。丘の頂上に位置する牧師館は吹きさらしの中に建っていて、台所の戸が開く度に風がもの凄いい勢いで舞い込んできた。やせ細ったエミリーは風に吹きとばされそうだった。彼女は骨と皮にやせ細り影のような感じしかなかったのだが医者をもよおすことには絶対に同意しなかった。家族の者が皆風邪を引いてしまう程の寒さだったが一番強いのが父で一番こたえたのはエミリーだった。彼女は何時迄も風邪から抜け出すことは出来ず咳は胸に来ていた。胸が痛いのだと姉シャーロットにはよく分った。脈を計ると 115 もあったが、その後はエミリーは絶対に脈を計らせなかった。

父は既に諦めていたが、シャーロットとアンだけは諦めず希望をもち続けていた。エミリーが死ぬなんてことは彼等には考えられなかったのである。エミリーは二人にとっては力の源であった。特にシャーロットはこのしっかりしたエミリーに縋りつきたい程の思いであった。

The weaker she became bodily, the stronger she appeared mentally.⁽⁸¹⁾

(体が弱まれば弱まる程、エミリーは精神的には強くなっていった。)シャーロットは心配して細かく病状を書きエップス博士にも手紙で相談

したが「ひどい病状です」と答えられるだけであつた。医者に頼んでもらうように親友エレンに云うことも出来なかつた。エミリーは総べてを拒絶したのであるから。その間にもエミリーの病状は驚くべき速さで悪化していった。だがその弱つた体にも抱らず、彼女は元気であつた頃と同じように家蓄小屋に餌をやりに行った。息はぜいぜいと苦しうだつた。それを無言で抑えようとするのだがその荒い息使いは何処にいてもきこえる程になつていた。又その咳で姉妹は一晩中眠れない程だつた。シャーロットは本屋から送つて来た本の一冊を読んでやつた。

Charlotte read out from one of the books that had come in the latest parcel from Smith, Elder. Not only was Emily long past the delight of opening their parcels to see what they had sent, but also of reading what had come. It was an essay of Emerson's, but even as she read she realized Emily was not listening.⁽³²⁾

(エミリーは本屋から何を送つてきてくれたかと小包をあけて見る欲ひは既に早くから失くしていたし、来た本を読むよろこびも失くしていた。エマソンの随筆だつたのだが、もうエミリーは読んでやつても聞えていない事が姉には分つていた。)

生前叔母ブランウエルの用いていた二階の大きな部屋に今は寝ていたがエミリーはその晩は唸つていた。翌朝早くシャーロットは部屋を抜け出して、広野から一枝のヒースを手折つて来た。牧師館に戻つたのは朝の7時だつた。エミリーの部屋に入り枕もとにその枝を置いたがもう彼女はそれを見る視力も無いことを悟つて姉の心は痛んだ。それにも抱らずエミリーは常の日のように起き上がると長い髪の毛を櫛けずろうとした。が感覚の無くなった手から櫛はポロリと落ちた。暖炉に落ちた櫛は女中が拾ひ上げようとした時は既に焦げていた。そろり、そろりと一段ずつ階段を下りたが、彼女はその段を二度と上ることはなかつた。十二月の薄明りの朝の光の中で姉妹はエミリーを氣遣わしげに見つめて座つていた。お裁縫の仕事を取り上げようとしたが、もうその力はなかつた。もう最後だとは二人にも分つていた。

She said, 'If you send for a doctor, I will see him now.' But when her sisters tried to take her upstairs to bed she cried out, 'No, no,'

These were the last words she spoke. She died shortly afterwards sitting on the old horsehair sofa.⁽³³⁾

「お医者さん呼んで下さったら今なら診てもらっていいわ。」と彼女は云った。姉妹が二階のベッドに連れて行こうとすると「嫌よ」と彼女は叫んだ。これが彼女の最後の言葉だった。

そのすぐあと馬の毛の古いソファに腰を下ろしたまま彼女はこと切れたのである。

誠に勇壮な最後だ。

'No coward soul is mine!' と言った通りの天晴れ見事な最後である。その部屋の前に立ち続けた時と同じ感動が今も私の中に湧き上り、 Celtic blood は私の中にも流れて来るようにさえ思われるのである。

同じ Celtic blood は水田先生の中にも流れたのではないかしらと思いつつ、先生に捧げるこの小論文の筆をおくことにする。

注

- | | | |
|------|---|--------|
| (1) | English History and Literature: Sakuraba and Inoue 大修館 | p. 17 |
| (2) | The Kenkyusha Dictionary of English and American literature | p. 167 |
| (3) | The Brontë Irish Background: Edward Chitman: Macmillan | p. 123 |
| (4) | The Brontës and their world: Phyllis Bentley: Thames and Hudson | p. 5 |
| (5) | The Brontës Irish Background | p. 53 |
| (6) | The Brontës and their world | p. 8 |
| (7) | The Brontës Irish Background | p. 126 |
| (8) | " " " " | " |
| (9) | " " " " | " |
| (10) | " " " " | " |
| (11) | " " " " | " |
| (12) | Haworth Harvest: N. Brysson Morrison: Dent Sons LTD | p. 125 |
| (13) | The Brontës Irish Background | p. 125 |

| | | |
|------|---|--------------|
| (14) | Wuthering Heights:Emily Brontë:Kenkyusha | Chapt. XXIV |
| (15) | Gaelic Source of the Brontë Genius:Cathal O' Byrne:Kennikat Press | p. 26 |
| (16) | Wutheirng Heights | Chapt. V I |
| (17) | " " | Chapt. VI |
| (18) | " " | Chapt. V |
| (19) | " " | Chapt. XXIV |
| (20) | " " | Chapt. XXVII |
| (21) | " " | Chapt. XXVII |
| (22) | " " | Chapt. XXIV |
| (23) | " " | " |
| (24) | " " | " |
| (25) | " " | Chapt. XXX |
| (26) | " " | Chapt. IX |
| (27) | The Complete Poems of Emily Jane Brontë:Columbia University Press | p. 243 |
| (28) | Haworth Harvest | p. 144 |
| (29) | " | p. 113 |
| (30) | " | p. 178 |
| (31) | " | p. 207 |
| (32) | " | p. 209 |
| (33) | " | p. 210 |